真夏の午後。ケイゴはジムの帰りにいつも通り近道をして公園を通る。32歳、筋肉質の鍛え上げられた体175センチ、70キロの体、日々のトレーニングで培われた筋肉。
陽射しが照りつける原っぱにくると前方に男が寝ているのが見えた。
逞しい体、Tシャツ、短パンのトレーニングウェア、日に焼けた逞しい脚が見える。
背中を向けて草の上に横になっている。
ケイゴは顔をみたくなり、少し遠回りだが男の近くを通っていくことにした。
近づくと、ぴちぴちのTシャツの上からでもたくましい筋肉がわかる。
足を速めて男の顔が見える位置に行く。
寝ていると思っていたがどうもおかしい。
近寄ると、無精ひげの生えた焼けた逞しい顔をしかめている。
目をギュッと閉じており、息が荒い。
少し割れたごつい顎から脂汗が滴っている。
ケイゴは「大丈夫ですか？」と声をかけ肩に手をかけた。

筋肉がＴシャツを通して手のひらに伝わってくる。
熱い！
男の反応は虚ろで急いで抱き起す。
途中、あまりの重さに尻もちをつく。
男が上にのしかかり、首筋がケイゴのすぐ目の前に。
汗のにおいが鼻をくすぐる。

ケイゴの唇が一瞬男の首筋をかすめる。
「うっ」と言う低いうめき声が聞こえた気がした。
ケイゴが「えっ？」と顔を上げた拍子に顎の無精ひげで男のうなじをなぞる。
「うっっ！」今後は小さいがはっきりと低く、太いうめき声が聞こえた。

「やっぱり」しかし今は早く木陰に行かなければ。
やっと木陰につき、木の根元に寄りかからせる。
見ると男の膝から下が日向に出ている。
ケイゴは男の膝に手をあて持ち上げようとしたが重くてできなかった。
男の前に行き、足を左右に広げてその間に膝をつく。
男の脚の片方の太ももを両手で持ち上げる。
じっとりとした汗の感触。
太くて硬い太ももを引き上げる。
手のひらにはっきり感じる肉のかたまり。
次にふくらはぎに手をかける。
逞しいが足首は締まっている。
濃すぎないすね毛がさわさわと手に感じる。
ケイゴはこのようなふくらはぎが大好きだった。
何とか脚を日陰に押し込む。

ケイゴは自分のリュックサックから水のペットボトルを出して、
男の口にあてて飲ませる。
男がむせて水が胸にこぼれる。
「スミマセン。」ケイゴが手で水をはらった拍子に指先が男の乳首をかすめた。
「あっ」短いが確かにうめき声が聞こえた。
「もっと」